

新会長からのメッセージ



生出 勝宣
Katsunobu Oide

「国際化」というと、今時のプロジェクトでは常に謳わなければならないキーワードのひとつであり、大抵の人が反対できない。実際、加速器の各プロジェクトでも否応無しに国際化は進行しているし、今後も一層進むことは間違いない。「国際化」の反対概念として最近耳にするのが「ガラパゴス化」で、日本の携帯電話が特殊な進化を遂げた結果、国際競争力を失ったと言われることを表す用語である。この対比には「国際化」は善で、「ガラパゴス化」は悪であるという価値判断が概ね含まれていると見受けられる。

しかし、学問においても文化においても、「国際化」が常に無条件に優先されるべき、発展のための条件であろうか？ 進化論とのアナロジーではあるが、ある学問・技術・文化が多様性をもつためには、その萌芽的段階において、外部環境との一定の隔絶が必要な場合があるのではないだろうか。どんな新しい学問・技術の手法でも、その初期段階では十分に競争力を持たない。もしすべてが「国際化」され、世界全体になんらの障壁もない状態では、そのような萌芽が大勢に飲み込まれ、十分に分化することが不可能になる恐れがある。その結果、学問・技術・文化の多様性が損なわれ、結局は全体が停滞することになってしまうかもしれない。

こう考えると、「国際化」が意味を持つのは、世界が一様でなく、それぞれに「ガラパゴス化」した異質な要素を備えている場合に限られることがわかる。つまり、「ガラパゴス化」は国際化の反対概念ではなく、むしろ必要条件である。各部分がその独自性特殊性を十分に発展させ、「ガラパゴス化」してこそ、「国際化」もまた異文化接触・異文化交流として意味を持つのではないだろうか。「ガラパゴス化」が即国際競争力の低下を招くわけではないことは、多種多様な日本文化を見れば明らかである。「ガラパゴス化」を恐れてはならない。例えば加速器学会の発表やプロシーディングズが日本語を主としていることは、「ガラパゴス化」を促進するものとして、積極的に維持すべきものである。